

エコー下穿刺のスキルが シャント維持につながった一例



医療法人 心信会

池田バスキュラーアクセス・透析・内科

Access/Nephrology/Dialysis

○清瀬 篤史

川原田 貴士 岩下 廉史 上野 庸介 谷口 英治
安藤 高志 安田 透 池田 潔

第30回日本透析アクセス医学会学術集会・総会

第30回日本透析アクセス医学会学術集会・総会

演題発表に関連する開示すべきCOI関係：なし

筆頭演者：清瀬 篤史

背景

- ・ 穿刺可能部位が限られ、同一部位への穿刺が継続されていた。
- ・ 同一部位穿刺に伴う皮膚の脆弱化・止血不良がみられた。
- ・ 新たな穿刺部位へのエコー下穿刺は血管径が細く断念された。
- ・ 元施設でのVA再建の検討によって、当院に紹介された。

患者本人はVA再建に否定的で、現在のVA維持を希望

目的：エコー下穿刺による新たな穿刺部位の開拓

患者背景

年齢・性別

50歳代 女性

透析歴

23年

VA

左前腕内シャント

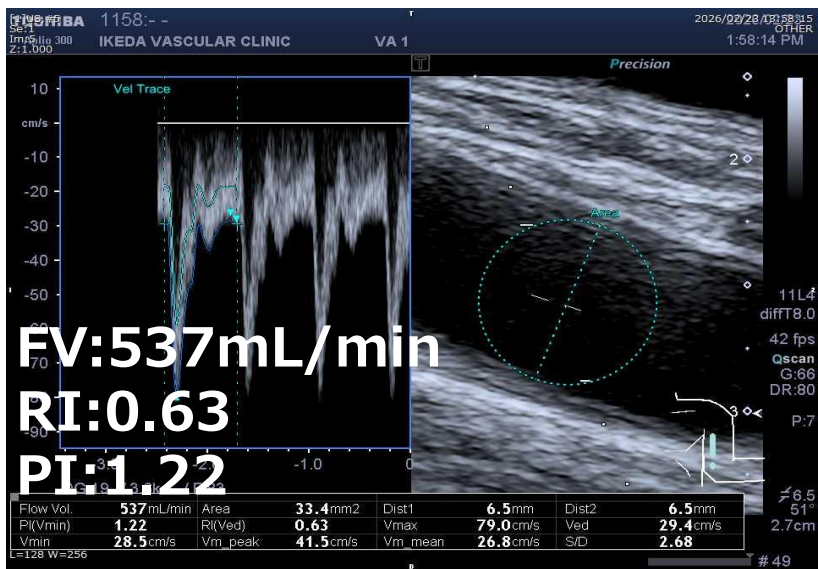
維持透析

他院での維持透析

当院にてシャントエコーによるVA評価を実施

当院でのVAエコー評価

① ショント機能評価

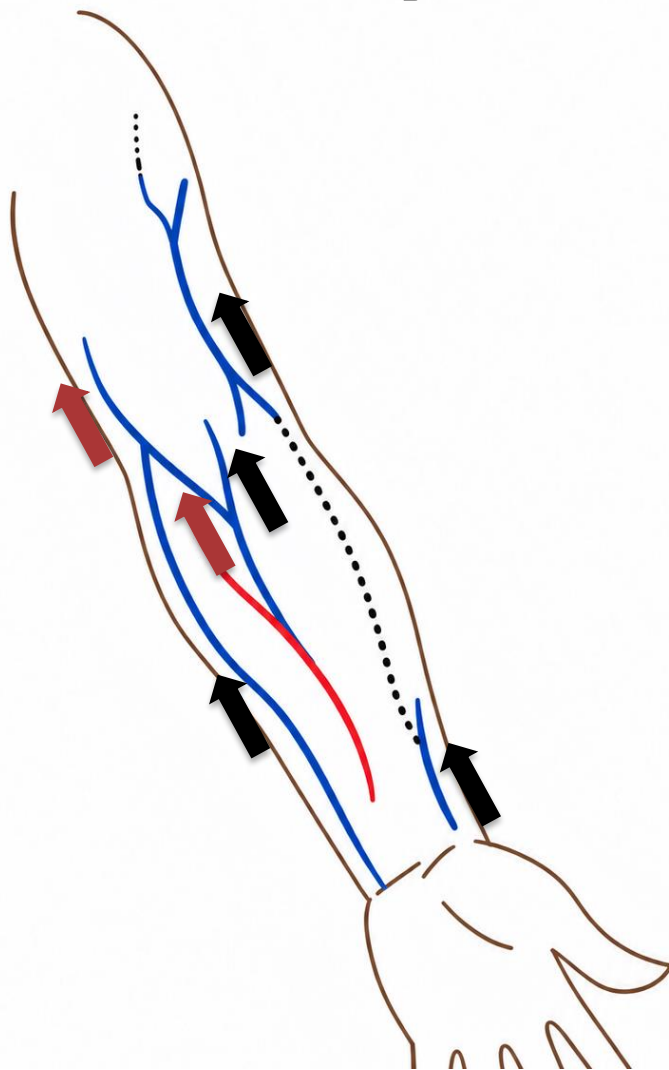


② 穿刺候補となった側副路（返血側）



穿刺部位の開拓

VAエコー評価をもとに、穿刺候補を選定 シャントマップ



穿刺候補

既存穿刺部位 2か所

側副路（返血側） 4か所

計 6か所

エコー評価をもとに
新たな穿刺候補を選定

エコー下穿刺の実際

- ・ 患者との相談による当日の脱血・返血部位の決定
- ・ 前回と重複しない穿刺部位の選択
- ・ 6か所のローテーションによるエコー下穿刺の継続
- ・ 穿刺困難部位に応じた血管描出に適するエコー機を選択

※側副路への返血時にみられた透析開始時の一過性の静脈圧上昇はあったが、治療中断に至るトラブルはなかった。

使用機器：FUJIFILM iViz air / FC1-X

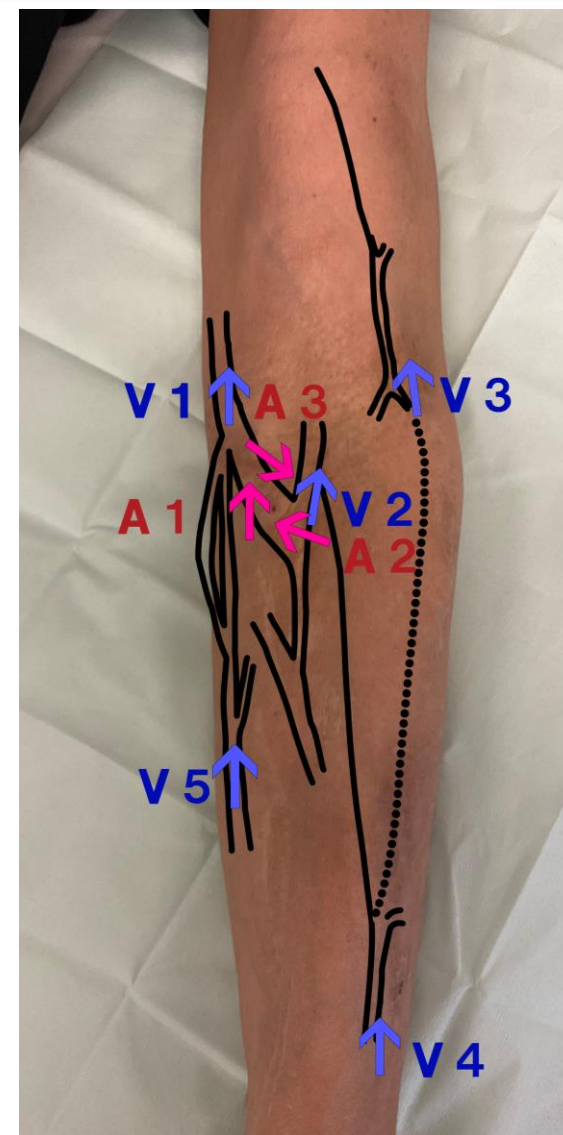


元施設へ戻るまでの約5か月間

選定した6か所のローテーションによるエコー下穿刺の継続

- ・ 同一部位への穿刺を回避でき、安定した透析を継続できた。
- ・ 皮膚の脆弱化に伴う止血不良を認めなかった。

- シャントエコーマップを作成、穿刺可能部位・血管走行を共有した。元スタッフが複数回来院、エコー下穿刺を見学し指導した。



シャントエコーマップ

- 元施設で維持透析を再開したが、数週間後、再び同一部位への穿刺となったため、本人の希望により再転院となった。

- VA全体をエコー評価することで、側副路を含めた穿刺部位の開拓が可能となった。
- 穿刺部位のローテーションにより同一部位穿刺を避け、透析を継続できた。
- エコー下穿刺を導入していても、穿刺困難部位への穿刺は一定の技術を要し、これが再転院の一因となった。

- エコー下穿刺による穿刺部位の開拓により、患者が希望する現VAでの透析継続が可能となった。
- VA再建だけでなく、穿刺技術の向上も現VAを維持するための選択肢になり得る。